

## CSW67 参加報告と感想

茂木千尋

### 【CSW オンラインイベント参加報告と感想】

はじめに、この度、私を日本女性監視機構のユースレポーターの一員として選出し CSW67 に参加するという貴重な機会をくださったこと、そして、参加にあたり数々の力添えをしてくださったことに心より深く感謝申し上げます。

2023 年秋から海外の大学院の子ども・青年学部で、未成年の社会的包括に関する教育政策・プログラム作成について勉強する機会に恵まれることが決まったなか、JAWW（日本女性監視機構）で「ジェンダー平等とすべての女性・少女のエンパワメント達成のためのデジタル時代における革新・技術変革および教育」を優先テーマにした CSW67 のユースレポーターを募集していることを知ったため、今回の CSW への参加を希望しました。

### 【オンラインでのトラウマ支援とその課題についての気づき】

CSW67 への参加にあたり、私が特に関心を持っていた課題として「オンライン環境が、成人女性・子供の（性的）トラウマからの回復にどのように関与しうるのか」というものがありました。この課題意識を持って参加することにした理由としては、第一に私の大学院での研究のメインテーマが「トラウマ・インフォームド・ケアと子供の社会的包括を目指す教育」であるということ、そして第二に、私が「デジタルネイティブ」世代であることにあります。

20 代前半である私は、「デジタルネイティブ」と呼ばれる世代群の中で社会にもっとも近いグループに属していると考えています（個人差はあると思いますが）。デジタル・リテラシーを学校で身につけながら成長しつつも、現在の小・中学生ほど SNS が浸透した子ども時代は送っていない世代です。「非デジタルネイティブ」と「デジタルネイティブ」の狭間にある世代と言い換えることができるかもしれません。私と同年代の方の中には、（私をふくめ）ソーシャル・メディアの発達による大きな恩恵も被害も深く経験したことがない人も少なくないのではないかと推察しています。私もその一人でした。

そのため、今回の CSW67 参加にあたり、私の意見は「デジタル化した教育・（医療的）支援環境では、時間と場所・プライバシーという足かせが減る分、トラウマ支援と包括が促進しやすくなるのではないか。」という単純かつ楽観的なものでした。勿論、インターネット空間では（ジェンダー・エンパワメントの視点で切り取ると）、

性犯罪者と繋がりがやすくなったり、SNS を使ったりベンジ・ポルノの被害が拡散されやすくなるという弱点は考慮に入れていました。しかし、支援を求める際に「経済面」「時間」「空間（移動距離）」等がネックとして影響が出やすい「デジタルネイティブ」である（トラウマを抱えた、あるいはその渦中にいる）子どもたち（そして成人した若年女性）こそが、デジタル技術の革新による（教育・医療支援などの）恩恵を最も受けることができる存在になるのではないかと想定しておりました。

CSW67 のイベントに参加し、そのような側面は確かにあると確認することはできました。例えば、The Angel Band Project 主催の平行イベント “Using Music Therapy to Support Survivors of Sexual Assault” では、性暴力被害者に対する音楽療法をオンラインでも実施しているという活動報告がなされていました。性暴力加害者との力関係等の問題によって外部へ直接出向いて相談することを躊躇してしまう被害者の方も、オンラインにも活動の範囲を広げることで、移動距離や資金面での問題が軽減されるため支援を得やすくなるというエンパワメントの形は、まさにトラウマ支援のデジタル化による正の側面であると感じました。

しかし、デジタル化の推進・改革の困難さ、あるいはある種の逆説的なものを強く感じるようになったのは、“Harnessing Technology: Creating Trauma-Informed Responses to Tech- Abuse with Survivors” と “The Impact of Technology on MMIP Issues” の平行イベントでした。“Harnessing~”の方では特に、デジタル技術が促進する家庭内暴力（Tech-facilitated domestic and family violence=TFDFV）がオンラインでの暴力と密接していること、つまり、デジタル技術により「（家庭内暴力の）加害者が被害者に時間・物理的距離を問わずに常にコンタクトが取れるようになってしまい、それゆえに被害者は加害者に全能感や「加害者がどこに行っても付きまってくる感覚」を覚えてしまうようになる。この心理が支援を求めるのを妨げてしまう」<sup>1</sup> という指摘が印象に残りました。

暴力被害者が支援を求める際に障害となるこの「助けを求めたくても加害者の存在（あるいは能力）が圧倒的なもの感じて諦める」という感覚を助長する「時間・物理的距離を問わない接触」を可能にするデジタル技術は、“Using Music Therapy”での話に重なる部分があると感じました。

1: Bridget A Harris “Technology, domestic and family violence: perpetration, experiences and responses” p3 より

デジタル技術の発展による「時間・物理的距離を問わない接触」で大きな恩恵を受けるのは、それによって取り払われた障壁（時間、空間、金銭など）が支援を求める際にネットワークとなっていた（被害者である）子ども・女性であるが、それと同時に、デジタル化による新たな接触の形によって最も vulnerable になり支援を得ることを諦めやすくなるのも、同じく（トラウマ状態にある）子ども・女性なのではないかということをおぼろげに学べたことは、自分の中の新たな発見でした。

このことを「新たな気づき」と感じたのは、参加前には「デジタル化が促進するのは新たな（性）暴力との繋がりである」と予想していたためです。私の中で、デジタル技術促進の負の側面は、「インターネットを経由しなければ出会わなかった見ず知らずの加害者につながる可能性を高めてしまう（＝新たな性被害に遭遇する）」ことだったのですが、パラレルイベントに参加したことで、「既存の暴力関係による（性）被害を深刻化させ、被害者をより弱体化させよう」という、デジタル化の負の側面の別の切り口に気がつくことができるようになったのは大きかったと感じています。

「デジタル化によって、既存の体制の中ですでに vulnerable だった存在がより vulnerable になりうる」という視点は、“The Impact of Technology on MMIP（=Missing and Murdered Indigenous persons）Issues”のイベントにも見受けられました。こちらは、（アメリカ大陸の）先住民女性がソーシャル・メディアによって促進された暴力の被害者になっているということを明らかにするものでした。先住民女性は「植民地主義・女性嫌悪・人種差別」という既存の構造の中ですでに minority（あるいは弱者側）に属しており、その上でデジタル技術やデジタル教育へのアクセスが制限されていることがその不利な立場を再生産し、暴力被害を強化させてしまっている、ということが指摘されていました。蛇足になりますが、このイベントではアメリカの先住民女性にフォーカスしていましたが、「植民地主義・女性嫌悪・人種差別」という女性（や子ども）に不利な既存の構造の大枠は、私を含む日本人・アジア女性にも当てはまる話であり、危機感を覚えるとともに、「大枠で同じ問題を抱える有色系のフェミニスト」という切り口で横の連帯を深めるきっかけになるのだなとも感じました。

### 【最後に】

今回、CSW67 に参加させていただくことで、デジタル環境でのトラウマ支援が抱える問題の重層性を認識することができました。

「新たな被害」だけでなく、「被害の強化」の問題にも目を配る意識が身についたことは、今後子ども・若年女性の支援を研究する際に大きな糧になってくれると考えています。また、オンライン環境ではありますが、様々なバックグラウンドを持つユースの方のお話を伺う機会を設けていただいたことで私自身がエンパワメントされると同時に、

自分の属性（例えば日本人であること）が文脈によっては権威性を持つ、という positionality の問題にも自覚的でいられるようになったと感じています。今回は貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。

#### **【参考文献】**

Bridget A Harris "Technology, domestic and family violence: perpetration, experiences and responses", 2020.